

「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らむ」

直訳すると、「心さえ誠であれば、祈らなくても神のご加護があるだろう」といったところであろうか。

菅原道真がこの有名な句を唱える以前から誠は最も優れた人徳の一つとして崇められ、我々の国民性を形作って来たことは間違いない。したがって、この言葉は道真一人の意見を表しているというよりも、それまでに形成され、日本人の意識の根底に根付いていた思想を表していると言っても過言ではないだろう。

しかしながら、私が初めてこの句に触れた時、大きく二つの違和感を感じたのを覚えている。一つは神の加護のために誠を実践することは誠実と言えるのだろうか、という疑問である。そしてもう一つは、誠は必ず美德であると言えるのだろうかという疑問である。確かに誠実である事は素晴らしい事ではあるが、ここでは無条件に誠の正当性を受け入れずに、更に突き詰めてその根源や正当性を考察してみたいと思う。

その前に「誠」という言葉の定義をはっきりと示したいと思う。誠には飾りや偽りのなき、飾りのない情、誠意、真心、など様々な解釈がある。その中で多くの解釈に一貫するものを探ると、嘘偽りのなさ、正直さという意味合いが見えてくる。そこでここではひとまず「誠とは嘘偽りがなく、正直である事」と定義しておこう。

それでは初めに、神の加護のために誠を実践する事は正しいのだろうかという疑問について考えてみたいと思う。あるいは、神の存在を受け入れがたいと感じる現代人の為に、神の加護を見返りという言葉に置き換えて考えてみたいと思う。社会では、嘘や偽りで人を騙す事は悪とされ、その反対である誠は美德とされている。誠とは他者を慮り傷つけない為のものであり、自己中心性とは対極にある美しいものと認識されている。しかしながら、見返りを期待して誠を実践する事はむしろ自分の利益を考えている自己中心的行為ではないだろうか。似たような議論がかの有名な新渡戸稲造の著書「武士道」でもなされている。彼がアングロサクソンの商人になぜ彼らが商売において誠を重んじるのかと問うと、嘘をつくよりも正直でいる方が多くの金銭を得るから、と答えたそう。彼は同時に、武士ならば金の為に正直を貫くよりも嘘をつくほうを選ぶであろう、と述べている。武士の世界では正直であるという形式よりもその

動機が重んじられたということであろう。私は彼らに半ば賛成し、半ば反対した。つまり、嘘をつかないことは誠を實踐しているように見えるが、その動機が不純であればその時点で誠実とはいえないのではないかということである。正直である事によって得られる見返りを期待して正直でいる事は美德であるとは考えられない。しかしながら私は正直であるよりも嘘をついたほうがよいと述べているのではない。報酬を求めて誠実であることは道徳的ではないが、だからといって嘘をつく方がよいと述べているわけではないという事である。何故ならば、嘘をつく事の根底に眠っているのは、相手を騙し自らが得をしようというより非道徳的動機であるからだ。従って私が述べたいのは、嘘をつく事はもちろん非道徳的だが、見返りを求めて正直である事も同様に非道徳的であるということである。

今までに述べたように、「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとも神や守らむ」という言葉には、見返りを求めて誠を實踐しようという非道徳性が潜んでいる。しかしながら、道真がこの言葉にこめたのは誠を實踐すれば救済されるという意味ではなく、祈りよりも自らが誠を實踐する事の方が大切であるとし、誠の重要性を説いたのであったのかもしれない。そのように仮定して、今度は見返りを求めた誠の話ではなく、誠そのものの根源について考察し、私の二つ目の疑問に迫りたいと思う。

さて、私の二つ目の疑問は誠が常に美德と言えるのであろうか、という疑問である。一つ目の疑問についての考察において、正直である事の報酬を期待した誠実さについては論じたので、ここでは誠という道徳観そのものの自律性について述べたいと思う。「善悪の彼岸」においてニーチェが論じた内容と似通ってしまうが、それにさらに自分の解釈を加えたいと思う。

そもそも誠という道徳観が生まれた背景にあったのは何であろうか。恐らくそれは、誠実さを善とし、嘘をつき人を騙す事を悪となす事で、自らが騙される事態を防ごうという動機ではないだろうか。つまり、誠実である事はそのように誠が道徳であると規定する事で社会を秩序立たせようという背景を持つのではないかということである。そしてそのようにして作り出された道徳観の根源はやがて忘れられ、いつの間にかその規定だけが一人歩きするようになったのではないかという事だ。したがって、その道徳観を盲目的に受け継ぐ人々がそれに従うのは、自律的動機ではなく他律的動機によるものであると私は考える。そしてこれはニーチェが「善悪の彼岸」で述べている道徳の起源という思

想に似通っている。ここで私が問題だと考えるのは、誠という道徳の起源が道徳的でないという点と、私たちが盲目的に誠は善であるという道徳に従っている点である。

一つ目の問題意識について考察したい。そもそも真の道徳とは、何かを秩序立たせる為のルールのようなものではなく、全ての人が自然と思いつく正しさをなくてはならない。従って、人間は誠実であるべきだという思想が、自らが傷つかない為の物であるならば道徳とは言えないのだ。しかし、果たして、誠という道徳観の根源は完全にそのような利己的動機に基づくのだろうか。少し前に誠の起源は嘘をつき人を騙す事を悪となす事で、自らが騙される事態を防ごうという動機にあると述べたが、それについてもう一度考えてみたいと思う。確かにそのようなニーチェ的動機は多分に存在し、誠という道徳観は少なからず非道徳的起源を持つと言えるだろう。そのように自分が得をするためという明確な意識がないにしても、無意識的に嘘をつくよりも誠実である方が結局は自分に利益があると計算しているのかもしれない。人間は動物である以上本能的に自分の生存の利益になるような物を求める事は否めない。しかしながら、同時に、私はその起源に自然発生的な要素も含まれると考える。自分が騙されたくない為に自分も人を騙してはならないと考えた他にも、そもそも人を騙す事は悪であり誠実さは善であるという意識が芽生えた、あるいは、そのように教わらなくても自然に芽生えるのであろうと考える。私たちが動物的次元から救い出す物は間違いなく理性である。そして、理性こそが人間の本能的欲求を抑え、人間として何が正しいか判断する心であると考える。理性によって「他者に対し正直である」という利他的な人間性が美しい物、正しい物とみなされたのだろう。この場合は自らの利益になる物を評価する本能的判断と、人としての正しさを判断する理性の意見が合致し、誠という道徳観が生まれたのではないだろうか。

だとするならば誠は必ずしも非道徳的起源を持つとは断定できない。その根源に非道徳性が潜む事は確かだが、同時に利他的で道徳的な起源も含まれるからだ。しかしながら、多くの人間が誠という道徳の非道徳的根源に気づかず、盲目的に従っている事は否めない。次にその問題について考察したいと思う。

世間では誠は美德として無条件に讃えられている。なぜならば、誠は自分の利益より他者を慮る精神だからだ、と多くの人は答えるだろう。彼らは、そこに潜む非道徳的動機に、あるいは自らの利己性に気がついていないのだ。それ

に気がつかず、誠を實踐している利他的で道徳的な自分という人間に満足しているのかもしれない。しかしながら、誠という精神を真に道徳的な物に昇華させる為には、その非道徳性に気がつき、それを取り除こうとする事が不可欠である。よって、無条件に誠を美德とみなし従う事は、その道の障害になるのである。

大事なのは誠を實踐する時に自らの中の利己性を認識し、そのような感情を理性により抑制する事であろう。誠についてよく考え、見返りや自己保身の心がある事を受け入れ、それが非道徳的である事を認識しなくてはならない。その上で改めて何故誠が善であるかを考え、自らの為ではなく、心から他者を慮る事でそれを実践できるようになるべきだという事だ。そうする事で「誠」という道徳そのものがより絶対的正しさを帯びた道徳へと昇華するのである。

私の考えをまとめたいと思う。まず、神の加護あるいは見返りを期待して誠を實踐する事は非道徳的である。しかしながら、「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らむ」という言葉に込められているのは、祈らなくても心さえ誠実であれば救われる、という神の救済を目的とした誠の推進ではなく、神に祈るのではなく自らが進んで誠を實踐していく事が重要だ、という意味であろう。道真は恐らく誠の重要性を万人が容易く認識できるようにする為に、祈りや神の加護について言及したのである。

次に、誠という道徳の影には、誠は利他的で美しい精神であるという自然発生的認識と同時に、自らが騙されないようにする為に規定されたという非道徳的起源が潜んでいる。そのような背景を認識せずに誠を實踐する事は、自らの利己性に気がついていないという事であり、真の意味で誠を實踐しているとは言えない。真に道徳的な誠を實現するには、そのような非道徳的側面を認識し私たちの理性を持ってその利己的な心を抑制し、純粹に他者を慮って誠実たろうとする事が不可欠である。

そのように個人個人が心を誠の道にかなえさせる事ができれば、万人が他者を思いやり誠実である世の中が達成されるのではないだろうか。そしてそのような世界こそ菅原道真が求めたものではないだろうか。